棋 博

特別
チ12
3643
16(4)

第一　拾待

剛

撥乃袞ハ簾懸ひ乃露き尤袖や

志ほ[illegible]

[illegible]

きそ[illegible]雲井の月をうれの宮

れ嶋よ秦[illegible]と東路りてい[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

扨の立て合ひ済んで行く佐藤の
舘よりひく山伏拵侍とびかけて行
き違へ佐藤乃舘よりて山伏拵
侍つるへ拵らぬ山有まだ佐藤
乃さらぬ憚なく舘よりはいとりあ
きらとも申 是き作をしたへども
催さらぬ拵をして行き違ひよりて

てん いうに訳なうたる 山前より 山伏
なりたりを言かりそ 十二人ほ言
ゐ 是ハ何 おさまりたる位子息ゐ
濃りなそ 是い佐藤次信ゐ子ゐ
法ハ信度の郎内より有ゐ 判官殿
乃御使ハ鳴の大合戦ゐ佐

早ちくせつ侍いめりける人をこれに通さ
れ　判官殿十二人の山伏とあり
奥へ御下りの由聞て祖母みてん
去れ接侍をもてなすべかる
べきと十二人御入へ　判官殿
みちくの高名ども　指ぶれ疎忽
きらるを聞めるおそれ御内へ入
仏へ参べきとて御対面を賜れ皆この中より
ちまたとなる　判官殿是
いかゝ　系いかゝ　仕達に
十二人沙汰　生霊の子の松

さればにやかたがたもあらはれて御前よ
参りし梅若は山伏たちの人の為なる
くだんのよき子どもの古への懈怠なる顕はし
みづからが身の拙き故よ御前に参り
きし心ざしも殊に御前に参りて候
なりし身の古佐藤庄司が後家。次信
忠信が母にて候。さるや親子恩愛けわ

うれしき事ありつる便りを申すべき人もなし
殊どもまかりたる山伏の懈怠なるもの
みな八人去ありげに摂待と申よ
現世の祈りとも為ともあるべく後生菩提
とぞ申しける。嫡子次信は八島にて
すでに討たれ。忠信は都にて失せぬと
聞こえしほどに悲しき事もあるまじく

供待

ぞうり進ぜむとすれども雨雲晴れぬ恩や
あぐりむとぞ供待をとぐめくれば
たくてうるしものうるいに日は五人三人
おつかるるとつかるとて絶ゆる事いまは海
さきびぐ十二人を見ぐ給ぐ給ぐ
ぐう秋君ぞ行きもうてこまを面をぞ
おを更ぐらべ云ぐ云ぐべきるものわび

ごう晩ぐ耳は辛度河ぐ行ぐぐれ
行待の行ぐぐ
兄弟ぐぐぐぐ思ぐ
上三月
親ぐぐぐぐ侵ぐ
中ぐぐぐぐ秋君ぐ
ぐぐぐぐ命ぐぐ
部ぐ独ぐ毎ぐぐ

供待

[illegible]と言はせて出でまほしけれ
ねたましかりしかど思ひかへしたりし
うらめしさやく思ひ
思ひもよらぬ事ありけるとて
きの山伏五人三人行つきゆきて
あくるまで侍ること十二人義
たまべきとて判官殿とうれ辛苦
ぬるとて所のかたもとり決信患仕
入ぬるまで判官殿れ河の
人の家をば河なべてもあり
ぬとりて所のうべし作のおとを
我ぬ河内に有りて去あれば大方を拙
量中さもとりつこ人をちづれたり
カヒヲ
うるよ物申山伏とて伏ぬ

流てつゞ〻へ〻ぬ仏きつる
宮僧へ山伏乃中ゝく八乃者弟
みゝく伏乃おゝぜ山乃中ゝ年
ゝゝ立ゝ人ゝたゝゝゝ今思出ゝゝ
判官殿乃御乳母ゝ松乃十郎権ゝ
魚房山伏ゝゝくまゝ海ゝゝあきゝ
山伏ゝゝ山伏ゝく渡ゝ
こゝゝ

出羽国ゝ羽黒山ゝゝ出ゝる宮僧ゝて
ゝゝ昔ゝ播磨乃人の声ゝてゝゝゝ
ゝゝと申ゝ坊ゝ播磨乃者
ゝ三の年継母ゝゝ
ゝ宮殿ゝ乗ゝ決信忠仏ゝ
ゝくゝゝめゝゝ
ゝ国乃人の声ゝ

て山伏をつかはして侍のやうに播磨
人うたてはきも思ひ出てム判官殿に
よどう申べしとゆるしをこうると給りて
狩人乃浦をくだり糸りあひの浦に侍る宇
治のやうにて鷲尾乃十
郎山伏かくしたる和うら申山
伏とてどこ山伏と考へめくらぐ

シテ山伏声高大事よて伏へ却人乃
聲うと行くべよ色ぶ者の拝み
仰ぐ物に行き見ま仰ぐやうに物
敷入くし行ひて行ぶ見き西塔
山伏ごさめ出ぶ者ハ色ぶ入人
三塔一の勇僧ぶ君乃一人
當千きれよ上ル一人
武士ぶ

衰へはてぬる身なれども、さも尋常に御心
やさしくましますぞ、あはれさよ人ごとに
余所目もしらず泣居たる人めをさへ
ひとしほあはれに、かく心ぞもよほすなる
げに力なき事どもを、尽きぬ涙のよるひるの今さら
早日も内へ御入り候へ　判官「増ほど誠次信の子
まさしく判官殿とはきこえさせ給ひ

子「うき旅にて候へども、十二人の山
伏の皆御顔を見まはして候へば揃
みなかなしき様なり　判官「偖もあるべきことは
何をか隠すべき　子「げにやいうた候ふまじ
とも人のみかくれなき御挨拶ひとあはれ
中々もよ　父が上さへまことようかなし
岩木ででもあらぬ義経なれば泣く

「さて、静元、ニ、ニ、元、
膳よ、梅檀、一葉、
ニ、ニ、「ト」、ニ、元、「ト」、
自、「ト」、元、沢信、
中、元、元、元、
と、奇、乃、目、
て、「キ」、
「入」、
尼、目、
き、元、

しまうとあるよう者てゞ、子、の事、こう思
出、「キ」、元、元、
中上、元、沢信、元、元、元、元、元、
閉、元、申、元、元、元、
きこうまこと、元、元、元、
雑、元、「キ」、元、沢信、元、元、元、
家、元、元、元、元、元、元、元、

きえ「平」長て御宮ゝ有ものゝ心
よ過つゝ雪を申りて御前ゝまい
りへ拾て入給へ入給へ
ゝ門脇殿の二男能登守教経
かゝれ糸つゝ船よりゝ乗懸りけるを
漕ゝせいこ源九郎義経よ
矢一筋まいらせ給て見たるの
が申さるゝ御矢面よた
ゝ出ゝ行ゝ
雪よ次信を心地ゝ聞入給て馬
入前よりを塞ゝ義経見よ有や
ゝ入給へ
其時ゝ教経へ寄ゝまたゝ
矢坪ゝ

たゞ次信ぐるまきりきる。鎧ノ胴ノ板押
ひきよせ巻かきぶくかつぎ。ものうちどけて射
こゝろ。はるひく給ひ。我君のぶ著背の
夢摺まきりと射こむ。梅を射る次信い
ぐるみ。ふ。奈ふ。奈ふ。奈ふ。奈ふ。
えだ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
うり。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

もの。次信を陣ノ内ノ。ものかをぶる
次信ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
うり。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
目。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
忠信ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
忠信ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
りど。舘。殿ノ。童。ぶ。ぶ。ぶ。次信ぐ。首

を自然(メガケナギサ)の方(カタ)よりも渡(ワタ)して忠信(ハシリ)ひとり
きりの矢(ヤ)を番(キリ)玉(ワラ)ひろ手(ニンナカ)射(イ)ぶるまひ(ジン)
やまうべ教経舟(フネ)うり乗(トノ)てこと者
ひろ髪(ガミ)をしぐ遼(ハルカ)の船へ投(ナゲイレ)
ぶどもく舟をてしかも眼前(ガンゼンアリ)
の敵(カタキ)を見(ミト)忠信(ジン)を捨(トフ)
梅(ミツ上ル)を敵(カタキ)の方(ムイ)へ(ニ)

今世界の面目ありがたきまで独り
ありたる塔に篇を扉かうをば庭
駿よあるまうべ十二人云山伏入ヤ三
人を作りなりて集とんと思えばいり
がうすうらべき其時義経居よ
かりて行ぬ鳥あく次信入ようよ
とんと時間つ多くいれを

やぶれぐ寄なりひよ次信を時よ頂
だたり申やうあるれ形見
替りにやつ二世の御
恩をもつて報謝を弟宗れうさ
そ露塵行情ぶ舊郷よ
句よ母と十よ
事れ不便りそ心よ雲ば

あはれて光りも闇くなりぬ其まゝ
まくし給はれむるくやよきかし 判官様
子郎あるさうぞんへけり手てぶせ
忠勤まうと曇らじれ後弁よ給ち世し
出しく忠信出給ず孫を書ね出て命
乃恩を報ぜんと思り事も寄らく
我り人のまゝ姿そてござんだよりも無

えぬうさのうれ果て悲しき 母へはをれ
は壊らのく更をしらぬ有明の月
君は盃を取出し御郎投よる我をまうきれ
判官上 ぎみやたのむそくてあまる人の情の盃
をいくとまこうあてる 鶴若投よ
そうかれ別れ又の御あるて給
仕えあく思ひあって十二人の山伏の姿

萩乃枝を折まはし座敷にまはりて
進みて男めらの群れたる家に入をとやらぞ
たまはれ去ほどにおのれはのつくと引行
だんく聞申てありかとそれや山宿を立
出る いかに誰かあるよ難をさげ弓
うかれん手あまる君乃御供申すとも
あまよそれも御供して行ずぞ 君乃

御供申てこそ親の敵をもおつ母をもれ
うけし弓矢乃にとりかり見して修行
乃山伏道に行のかさ忍ありべきぞ
左あらば思ひ出せりちひさき頭巾
篠懸をとりて掛てたび給へ山伏道
乃御供を舞 弁慶長刀を押へ作
べくに申けり鶴ヶ岡殿まで御供有た

くるぎよの道具さと掛へ給ぶ日を迎
ひよしまるべく八まつとがうう中くる
手をもひよまいる翁　わきもむ
うれり爺うんかと面きぐよとと
りまてぐるけるのさかれ雅さ八城
ぐと心えくぐと言葉のうりだる
ぶ八八を得て宮僧ぐ宿をいぐ

静　ハシテエニ
きれバハヤ　考居る寝若を抱いき　ゆくハ
あぐうり　ぐうとあるやぐ
ぐ八　ニ下中　ニ
ゆうぐ

右之本者觀世大夫章句眞本令版行畢

正德六丙申歲弥生尚又天保十一庚子歲孟春改正再版

二示来荏苒數十年ノ星霜ヲ經ルニ後ヒ改正增補ヲ加ヘモ

印刷ニ附セザレバ之ヲ世ニ公ニスル能ハザルヲ悲ミ今般

宮内省御用達觀世清孝校合ヲ以テ茲ニ之ヲ上梓ス云

明治十年十月　出版人　京都府平民　擔　常次

同　十二年三月　内百拾番　出版御届　發兌

同　十二年九月　外六十番　出版御届　發兌

同　十三年三月　外六十番　出版御届　發兌

同　十四年四月　別能廿番　出版御届　發兌

同　十六年十月廿五日別製本御届

上京区第九組二条御幸町西入丁子屋町

東京 観世清孝
梅若 實
京都 汀山晋 三
浅井喜次郎
林 喜右エ門
薗 久右エ門
浅野繁之助
林田喜代造
武田藤 馬
藤木保 刈
大江信之助
井上勝太郎
立花傳 三
三宅作十郎
奥田彦右エ門
馬淵太右エ門

大阪 生一左兵衛
大西濫一郎
橋岡忠三郎
岡田泰 造
新西市兵衛

大津 原 五郎助
草川愛 助
岩佐富三郎
佐見田中仁助

諸國賣弘所書肆

東京 堀井吳三郎
大阪 船橋孫兵衛
越後高田 松本善助
迫間長濱江町 清水庄平
伊勢松濱町 古田作平
東洞院三条 玉井新次郎
四条堀川町 村上勘兵衛
三条寺町 大谷勘兵衛
四条高倉 杉本甚助
丸太町西洞院 福井源次郎
寺町五条 澤田友五郎
四條小路 藤井作兵衛
四佛小路 山田茂助
古門前 北川甚七
澤田吉右エ門

観世流うたい本賣弘廣告

右謡本八浸来但山本長兵衛所有ハ元治元年七月京都大火ニ物土蔵ヘ焼失ニ付
保版ハ残焼失候ヘ山本版本彫刻可致ニ付ハ元不ハ表ニ付彫刻難出来ニ付據我ホ方ヘ引
受居ニ付其後長兵衛死去山本絶家ニ付相成其有観世家元ハ新版願出ハ元観世
家元ハ右謡本ハ来数十年の星霜を経ハ摩滅ニ付改正増補ハ加ヘ印刷ハ附ニ付
悲ニ明治十年第廿三世観世家元ハ会略と相成版本彫刻ハ絶有ニ付同年ハ来新版彫刻
於私店販賣ハ旨右謡本奥書ニ新ハ一冊ニ付上何ハ幸用向ハ御下被仰奉願上候

一大本 壱番綴 壱冊ニ付 代價金

右謡曲ニ付好ニ付慶賀ニ付尚又内外揃本ニ付不足有ニ付ハ注重次第足本仕ニ付注
用向御ニ奉願上候

明治十六年十月

観世流謡本根元
山本長兵衛後傳
檜常介